

江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当・宮地信良

はじめに

国立公園満喫プロジェクトの立ち上げ以来、国立公園の上質な利用を目指す動きが各地で活発化している。「キャンピングからグラмпビングへ」といった公園施設の高級化への流れが各地で見られるが、一方で施設が何らかの問題を抱えたままになっていたり、来訪者のニーズに答えられていないため不満をもたれるケースもある。国立公園の主役は来訪者であり、来訪者の目線に立つて利用上の課題を発見し、それを一つ一つ地道に解決してゆくことが、実は上質な利用への王道なのではないだろうか。本稿では、国立公園の施設の課題を解決した例をいくつか示し、今後の上質な利用を進めるのに有効と思われることについても考えてみたい。

公園施設の課題解決事例

(1) 利用者の声を活かすことで課題を解決した例（戦場ヶ原歩道／日光国立公園）

以前から戦場ヶ原湿原には一般的な複数の木道が整備されており、小学校の修学旅行の定番コースとなっていた。近年はガイドによるインタープリテーションも多く行われるようになったが、木道の構造上、木道上で観察や解説をしていると後ろの班や一般の利用者を待たせてしまうため、ガイドからは「使いにくい」という声が上がっていた（写真1）。この課題を解決するため事業執行者（環境省）は、木道の再整備に当たって、幅員が一・五mの幅広い単線の木道に変更した。これによって団体の解説中にも追い越しができるようになり、心置きなく観察や解説



写真1 従来の木道



写真2 新しい木道

とにぎやかな学校団体とが混在しているため、静けさを求める大人の側に大きな失望感を与え「戦場ヶ原には行きたくない」という来訪者が増えていることである。これについては今後個人と団体の利用の併存を図る新たな方策が必要である。

(2) 現場を観察し、原因を究明したことで課題を解決した例（湯元集団施設地区／日光国立公園）

湯元集団施設地区への取付道路は最初に湯ノ湖畔を通る。湯ノ湖が湯元の最大の興味地点であり、来訪者は誰しも湯ノ湖畔の駐車場に車を入れたのだが、二〇台程度の小規模な駐車場はまたたく間に満車になり、あふれた車が湖畔道路にズラリと路上駐車をしていったのがかつての姿であった。状況を観察してみると、奥にある駐車場がドライバーから見えないため利用されず、小規模な駐車場が湖畔にあることが路上駐車の原因であった。

ができる木道に生まれ変わった（写真2）。
しかしまだ課題が残されている。それは同じ歩道に大人のハイカー

このため事業執行者の環境省は湖畔の駐車場を撤去し、代わりに奥の既存駐車場を湖畔近くまで拡張して路傍に大きな誘導標識を設

(3)ハードにソフトを組み合わせることで課題を解決した例(排雲山荘／台湾・玉山国家公园)

富士山はご来光を拝む時間に山頂への登山者が集中するが、台湾の玉山国家公园(国立公園)にある台湾を代表する山、玉山(標高三、九五二m)も同様である。山頂付近の登山道は落石も多く、混雑は危険に直接つながる。登山者は山頂に近い山小屋(排雲山荘)



写真3 一掃された路上駐車と誘導標識

置した。これによって湖畔の路上駐車は嘘のように解消した。小さな駐車場の移設と目立つ誘導標識だけで路上駐車を無くすことができたのである(写真3)。

に宿泊して早朝出発するという行動をとることから、台湾の国立公園当局はこの山小屋を定員までの完全予約制とし、入山の許可もこの人数に限ることによって山頂登山道の利用者をコントロールしている。これはハードとソフトのパッケージによって、オーバーユースという課題を解決した例である。私も以前ここに泊まって登頂したが、混雑することもなく「上質な利用」を実感することができた。現在では建物も立て替えられ、食事付きのさらに立派な山小屋(写真4)になっている。また人数の割り当てには外国人枠が設けられており、インバウンドにも配慮されている。



写真4 現在の排雲山荘

さらに上質な利用を進めるために

以上見てきた三つの事例は比較的シンプルなものではあるが、共通するのは課題を解決しようとする事業者の強い意思が見て取れることである。利用者の意見を吸い上げる、現場を徹底的に観察する、ハードのみならずソフトの施策を考える等の作業を計画設計の前に行っている。

最近の公園施設は全体に質が大変高くなってきているが、そのような施設といえども整備された後に新たな課題が生じてくるものである。ここはレンジャーが来訪者やガイド、民間事業者等の声も聞きながらハード、ソフト両面の課題を見逃さずに発見することが大事であろう。また本稿で紹介したような解決事例は全国に多数あるはずであり、具体的事例を関係者で共有、公開するシステムをつくること有効ではないだろうか。あるいは国立公園として優れた建築物や街並みを広く紹介するための表彰を行う、建築物や標識等自然公園施設のプロ集団をさらに育成する等々、上質な利用に向けた

新たな手法を大胆に取り入れてゆくことを期待したい。

公園施設を考える際には公園計画の利用施設計画が大きくかわってくる。その計画手法の根幹は永年改定されることが無く、整備方針は「〇〇に〇〇のための〇〇を整備する」といった定型的な記述に留まっているものが多い。これだと一旦整備が済んでしまえば、この計画が存在する意味はほぼ無くなってしまうことになる。私が日光国立公園の旧日光市域内の単独施設、道路(車道、歩道)、運輸施設で、計画書に載っているもののうち整備済みの割合を調べたところ、何と六四%から一〇〇%に達していた。上質な利用を標榜する今、利用施設計画手法の再検討とともに、事業決定も含めた事業計画のシステム全体を見直す時期に来ているのではないだろうか。

宮地 信良●みやじ のぶよし

環境庁(当時)で国立公園の現地管理、野生生物課勤務等のもと中途退職し、有限会社自然計画代表取締役として栃木県日光市で調査や自然ガイド業務を行っている。江戸川大学国立公園研究所客員研究員、日本スノーシューインング連盟副会長。